

# 私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

## ●マヤ遺跡を見る

2009年、女房とメキシコ・ユカタン半島のマヤ遺跡を巡るツアーに参加した。

女房との旅は1966年の新婚旅行以来、43年ぶりであった。

アメリカ大陸の原住民によるマヤ遺跡建造物群は私の学生時代からの憧れであった。

一つ一つの遺跡・建造物の造形は建築設計を目指す私にとって見習うべきデザインだった。建物と建物との間に作り出される屋外空間の緊張感は身震いするほどすばらしかった。

建築科の学生時代、何度も繰り返し見開いたマヤ遺跡の写真集は、私にとって建築設計実習のバイブルだった。

成田を飛び立った旅客機は千島列島に添って北上し、カナダのバンクーバーに立寄り、ここからアメリカ大陸の太平洋岸をメキシコシティへ迄南下した。

メキシコ市内を観光した後、ユカタン半島のマヤ遺跡群を周遊するバスに乗った。

ユカタン半島ではチチェン・イツツァ遺跡、マチュピチュ遺跡、パレンケ遺跡などを見学したが、チチェン・イツツァ、ウシュマル遺跡の印象が強い。

チチェン・イツツァでは、ククルカン神殿が、ユカタン半島の多くのピラミッドの中では最も均整がとれた形をしていた。

周囲の低層部をを4列の列柱で固めた戦士の神殿のデザインも特に優れた印象が残った。

天文台、球戯場の遺跡など遺跡の保存修復がしっかりしていて、かっちりし完成度が高い建築デザインがつよく印象に残った。

マヤ歴の後古典期(900年～1500年)に建設された都市、ウシュマルの遺跡群も深く感銘を受けた遺跡都市である。

ウシュマルの遺跡群にあって、魔法使いのピラミッドは、珍しく円錐形をしていた。この形により、姿が優美でどっしりとした迫力がある。4棟の建物が四角く囲み状に配置された尼僧院は、東西南北に異なったデザインの建物が作り出す屋外空間に緊張感があり面白い。

ティカルの遺跡は発掘途中の印象を受けた。樹木は伐採された樹木や、まだ伐採されないものも残り、遺跡と遺跡の間の屋外空間に林が残っていて、向かい合う史跡



チチェン・イツツァ ククルカン神殿



ウシュマル 尼僧院

建築物の間の空間の面白みが意識できない状態にあった。

また工事用架設足場が掛けられた状態のピラミッドも残されていた。

財政難によるのか発掘途中の遺跡を見ることができたのは、遺跡の発掘調査はこのような進められるのかと勉強になった。

ユカタン半島のマヤ遺跡群ツアーの後、メキシコシティに戻り市内に残るマヤ遺跡、ティオワカン遺跡を見た。この遺跡は広大なスケールだった。中央のピラミッドは広くゆったりとした勾配で、このピラミッドの前面には幾つもの遺跡群が何処までも向かい合い並んでいた。

アメリカはコロンブス以降の開拓者たちがヨーロッパの文化を接木したものにすぎないと思っていたが、マヤの遺跡群は想像よりはるかに迫力があり、太古からアメリカ大陸の大地に根を張り存在していた。

近・現代建築の巨匠、コルビジェ、グロピウス、ミース・ファンデル・ローエ、等のうちアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが最も優れた建築家であると私は思う。

ライトこそがアメリカの風土に根差した建築を創り続け、取分けタリ阿森の建築はアメリカの大地に根差した建築群であると思う。

ライトの建築は、アメリカの大地から生まれたマヤの建築文化を継承していると思う。

### みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。